

□12月8日礼拝説教(隅野徹牧師)短縮版

「救い主である神」(ルカ1:39～56)

「マリアの賛歌」は「マグニフィカート」と呼ばれていますが、その意味は「大きくする」というものだそうです。つまりは「自分を小さくする、逆に神を大きくする！」ということです。わたしたち人間は傲慢になりやすい者です。神を大きくせず、自分を大きくし様と生きています。しかし神との正しい関係に歩むためには「自分の小ささを認めてへりくだることが必要」なのです。

48節の言葉にご注目ください。「身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです」という言葉の「身分の低い」は「社会的地位が低い」ということよりも「神との関係において、小さな者である自分ということ」の告白だと受け止めたいです。その上で「神と正しく歩めていない小さな私をも神は愛してくださったのだ」という信仰の告白をしているのが48節なのだと理解しましょう。

つまりは、この神の恵みがわかったからこそ!「今から後、いつの世の人もわたしを幸いな者と言うでしょう」と言っているのではないのでしょうか?マリアの賛歌が教える「幸いな者」は、マタイ5章1節以下の「山上の説教」でのイエス・キリストの教えと同じだと私は捉えます。「神の前で自分の小ささを認め、身を低くする」しかし、「その身を低くしたところから、神との関係でも小さな者でしかない、こんな私に神が目を留めてくださった。そして御業のために用いて下さっていることを喜べる者が幸いな者」なのです。50節以下も、このことを教えていると理解します。

53節に「飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます」という言葉が出ますが…ここでいう「飢えた人」とは、食べ物が無い人という意味よりも「自分の中に何の富も豊かさも持っておらず、自分で自分を養うことができないと自覚する人」のことをいっています。神に頼り、お願いするしかない…しかしそのような者を神は「憐れみによって養い、育んで下さる」のです。(終)